

千里山の魅力の分析

編集部

私（萩原）は千里山会に名前がまだなく、その名を募集した時の集いより参加させて頂いております。96年の銀座『あしべ』で催された時から、ということになります。それまでこのような組織があることなど全く知りませんでした。

以来、この会の運営や会誌のお手伝いをさせて頂きつくづく感じたのは、会員の皆さんの千里山への熱き想いの大きさと強さです。

故郷への想いは故郷を離れているからこそ？

千里山の魅力の中に、当時の千里山の美しさも関係しているかもしれませんが、やはり楽しかった当時の想い出でしょう。親・兄弟姉妹はもとより、近所のお兄ちゃん・お姉ちゃん、学校での仲間と遊んだこと、苦しかったり悲しかったりしたこと。

でもそれを懐かしく想い、楽しんでいるのは今で

す。千里山会で語らい、あるいは会誌に寄稿したり、他人が書いたものを読むことで。

この千里山会という存在こそが摩訶不思議。しかも皆さんの千里山への思いの丈は全て会誌の中にあります。と同時にその想いを今となっては、会誌から汲み取るしかありません。

そこです。千里山会誕生の経緯（いきさつ）を追い、その考察から始めて行きたいと思えます。

一・千里山会誕生の不思議

海外でも比較的日本人が多く住む都市には、必ず『日本人会』があります。

またその昔、東京や大阪と言った大都市には、各『県人会』がありました。

高校、大学、現役時代を過ごした会社、その全てにOB会組織があり、専任事務局を持ち、年次総会や会報・会誌を発行しています。

ただそのような集いと、千里山会はなにか違うような気がします。『どこが？』『なぜ？』『どのようか？』違うのか。

我が千里山会初代世話人代表の飯島泰蔵さんも、千里山会会誌2号の巻頭文『所感』で次のように述べられています。

「世の中には数々の同窓会が作られて参りましたが、我々の千里山会も勿論その一つに過ぎません。しかし卒業後何十年も経た後に、忽然として結成の名乗りを挙げたという例は、極めて少ないものでした。母校を巣立って全国の各地に散らばり、あるいは世界に雄飛して行った多くの卒業生が、長い年月の間秘かに心の底に秘めていた望郷の想いがあつたればこそ、ここに見事な華を咲かせることが出来たのです」。

それでは過去の会誌を紐解いて、まず千里山会誕生までのあらましを再確認します。

* 初めの一步

(注) 名前の上の数字は千二小卒業回生。敬称略。

1970年(昭和45年)

千里第二小学校東京同窓会創設の動きが起こり、
9 藤田田、宇野隆造、疋田敬一郎、12 福山博寿、

14 三笠洋一、三分一克美、宇野博各氏 この七人の侍により、名簿作成を兼ねて同窓会の準備会が開かれた。

1971年1月17日 新宿

『千二校同窓生の集い』が26名の出席者でめでたく旗揚げ。

出席者の中には9 飯島泰蔵、大きな古時計の作詞者13 保富康午、美川英二の名が見られる。さらに18 南部敦子が出席の連絡後、同窓会開催日までに交通事故で逝去。

ただ当時、中心になって活躍された方、出席された方は皆さん働き盛りの40歳前半とあり、多忙の時期でもあったことから、その後長く中断しました。

しかし23年後の1994年、福山博寿より14 柿崎眞吾に千二小同窓会の再会を要請する電話が入り、同時に先の方々を中心となって

第一回東京同窓会準備会が再び蘇りました。

* 次なる二歩(復活祭)

1994年7月29日 池袋「二つの部屋」

33名の出席者で、開催。

この時には8回生、9回生とおられ、14回生の柿崎が末席に近い方。18回生で現世話人代表の片山の名も見られる。

最後に合唱が企画されていて、歌詞が配られました。その歌が『仰げば尊し』、『夏は来ぬ』はともなく、『廣瀬中佐』、『婦人従軍歌』。

大いに盛り上がった会は、翌年の再会を誓い合い、千里山の空気をたっぷり吸ったような気分になりながらの散会だったそうです。

1995年11月18日 銀座「京樽」

75名の出席者を集め開催。この時の盛況さが、翌年の集いを生み、次第に千里山会という確たる組織へと向かって行った。

会場は14 柿崎と同級生の田中(宇野)博がオーナー会長だった銀座京樽と決まり、さらなる準備も京樽の当時社長(現千里山会世話人代表)

18 片山 章で進む。席も前年の7割増し準備したが、万が一 閑古鳥が鳴いてはと、同窓会案内を朝・毎・読とも無料で掲載と知り、10月に連続して掲載。さらに戦前は木管楽器を吹けば右に出るものない6 井上敬三が出席だけでなくサクスを吹いてくれることに。

さらに大阪はもとより伊豆、仙台、静岡、在関東地区の戦前卒業生の方からも続々出席の通知。また逆に卒業年次が昭和20年代、30年代と若い方へも延び75名にも。

とうとう京樽も対応しきれず、18回生を境に会場を2つに分けた。実に30歳の歳の開き。

同学年の横の絆に兄弟姉妹さらには当時も千里山に在住されていた親も加わった縦、網の絆が媒体となって、組織化が進行したからだとして柿崎は記す。

この時の会を契機に、会の永続性を期し、いろいろの布石が打たれた。

◎ 総会・懇親会を毎年実施する。

◎ そのために複数のメンバーで事務局を運営。

- ◎ 規約を作り組織運営の切り替えを謀る。
- ◎ 運営基金を募集する。
- ◎ 全員参加の同窓会にすることを考慮し、直ちに行動に移る。

*** 会の名の募集―決定―千里山会誕生へ**

1996年11月16日 銀座「あしべ」

87名の出席者で開催。この頃になると、4月に武蔵・飯島・平の3氏が発起人となり募集した基金は、百名近い賛同者により60万円を超える額となり、運転資金となって今も大きな支えとなっている。その他、前年決めたことを実施。

武蔵が新宮島病院長として広島に去り、飯島が金沢の北陸先端科学技術大学院大学副学長に就任。しかし精力的に活動継続。

世話人会の構成、学年幹事による幹事会を作り、合唱隊の募集等を決めた。会の名前は前もって募集していたので、懇親会終了時に59点の応募があり、懇親会終了時に投票回収。

散会後の集計結果、比較多数で『千里山会』が選出された。名付け親は11伏見千瑞子。

更に今後の会の運営には16清水健至、18白鳥摂子、17宮中博、梅本(渡辺)ひろみ、23高橋(白鳥)尚子が当たること決定。

1997年11月15日 千里山会創立

銀座 「ライオン」

108名の出席者の元、会名・規約も決まり、千里山会創立総会が華々しく開催。

二. 千里山会の特徴

千里山会誕生の経緯(いきさつ)を見てお分かりの様に、この千里山会を創ったのは、昭和一桁生まれを中心に前後数年生まれを加えた方々です。

その人数、職種の多彩ぶり、著名人の数、どれをとっても対抗できるのは、地元千里山しかありませんが、地元ゆえの難しさを当時千里山で『同窓有志親睦会』の世話人代表を務めておられた8回生武田卓氏が千里山会誌2号で次のように述べられています。

「現在この土地で学年にとられず、年齢に差の

ある人達が一堂に会する機会を作るとは、大変困難の状況に有ります。又近隣に同級生が比較的多く居られることから、全体的な同窓会より、同学年の親睦会を適時持たれているようです。その上教育制度の改革により義務教育が中学までとなり、小学校を卒業した生徒の殆どが新設の吹田市立一中に進み、小学校の卒業生より中学の卒業が同窓生の結びつきを強くしているのが実情です」。

その点、東京近郊には相当年配の方から切れ目なく、本人およびご主人の東京転勤で移って来られ、今では相当数の千里山出身者がおられます。それも年齢や男女が万遍なく、東京だからこそと言えます。更にその職種が千里山時代を反映し多彩にわたり、商社、銀行等金融関係から、流通部門、技術屋、ジャーナリスト、音楽・美術と言った芸術家、アスリート、医者、教職関係と多彩です。

*** 昭和一桁生まれとは？**

大正15年(昭和元年)生まれ 千二小10回生
～

昭和9年(1934年)生まれ 千二小18回生
千里山会に関しては、前後数年を加えた14年間ぐらいでしょうか。

この年齢だと、終戦を千二小生で、戦地で、勤労奉仕の軍需工場で迎えられたはずで、さまざまな体験談が初期の千里山会誌から読み取ることが出来ます。

大変だったのは、終戦で一夜にして変わった価値観や善悪観でしょうか？

「世を指導する立場にある者だけが時代に迎合しているのではない。一般民衆もそうであること、少年の目で僕たちは見て来た。民衆は時の権力に迎合して身の安全を図る本能を有している。当時は不潔感を感じた」。昭和6年生まれの方。

*** 後輩たちの活躍**

千里山会の総会も昨年で22回を迎えました。千里山会と名付けてからだけでも22年が経ちます。一番最初の旗揚げからだ、実に半世紀近くに及びます。その間、会を育み発展させていったのは、昭和一桁生まれの方々の後輩たちです。

三、千里山の特徴・魅力の源泉

千里山の魅力分析として、これから展開するのは、皆様の頭の中に残った思い出を会誌を通じて知り、そこに私自身の千里山経験と、想像を混ぜ合わせたものです。異論、反論もあろうかと思えます。それらの起爆剤になってくれれば、と思っています。

『千里山と言う土地の特殊性』、『千里山に住居を構えた人たちの特異性』、『大正末期から戦後10数年という独特の時代』この3つがタイミングよく重なった結果だと私は思っています。そのどれ一つが欠けても、今日の千里山会は存在しなかったと確信し、タイミングは奇跡と感じています。

① 地理的千里山の特異性

千里山は大正時代の新興開発地で、大阪の中心地から鬼門の方向にあったこと、砂地で肥えた土壌ではなかったことから、昔から大阪の台所を賄うほどの農産物に恵まれていたわけではありませんでした。結果、佐井寺や新田等に農家はあったが、大阪に

近い割に、千里山及びその後更に開発された千里ニュータウンや万博地といった広大な地が手付かずで残っていました。

ということは、昔からの鎮守の森、神社・仏閣はないが、同時に柵（しがらみ）もなかったということとです。

さらに車の発達していない歩が中心の時代で、実に程よい大きさの街でした。程よい狭さと言った方が適切かもしれません。

下の噴水から東西南北どちらに向かっても、大人の足で5〜6分も歩けば、家並みは途絶え、竹藪、田園、小山や崖でした。

丁度、一小学校校区程度の広さ。昭和17年に千里山に移ってきた我が両親は、いつの時代の千里山か知りませんが、戸数800、人口5千人と言っておりました。子供は4〜5人、祖父母はおらず、両親と平均6人家族といったところでしょうか。

これは実にコミュニケーションを図るのに丁度いい大きさと言えます。地域が狭ければ狭いほど、お付合いは濃くなり、たいがいの家が子供で繋がって行きます。

更に、娯楽の乏しい時代、小学校の運動会や学芸会は、地域最大のイベントで、小学校中心にコミュニティが形成されていた、と言っているのではないのでしょうか。しかも当時の千里山一世（親の世代）は実に若かったのです。

勿論、多くの方が会誌に書かれているように、計画的に作られた美しいモダンな街でありながら、多くの自然が残り、豊かな環境で幼少期を過ごし、それが大人になって共通の思い出でもありました。

その他、あんなに大阪に近いのに、空襲の経験がない、つまり破壊されたものがありませんでした。

② 千里山に移り住んだ人々

日本は明治維新後開国し、外国の力ではあるが、産業革命を成し遂げました。それまでは土農工商と言う身分に基く職業が固定されておりました。例えば、小作であっても親の家業を継げるのは長男のみ。残りはどこかへ奉公人として出て行くしかありませんでした。それが維新以降、徐々に新たな職業が生まれました。軽工業からそのうちに重工業へと移り、その製造業・販売業・輸出入の担い手として、商社

や設備投資への金融業、インフラ関連仕事の担い手としての技術者及びその育成に向けた教育関係、法律関係者、中央・地方公務員、報道関係者が誕生しました。

欧米では、産業革命によって、新たにブルジョアジーなる階層が生まれました。平等意識の強い日本では、それがサラリーマンと呼ばれる集団が誕生し、維新後半世紀、この新たな階層の中のインテリ層として定着してきたのが千里山一世です。

我が両親はともインテリ層などではありませんが、多分、そう言う雰囲気が好きだったのでしょう。その雰囲気誘われてか、実に多くの著名人が、人生の一時を千里山で過ごしています。

球界の魔術師と言われ、西鉄球団を率いて何度もプロ野球日本一に輝いた三原監督。チキンラーメンを創った安藤百福。戦前のオリンピック、ゴールドメダリスト南部忠平および織田幹雄の面々です。これは全て会誌からの情報です。

さらに別の面から眺めみると、
*大阪の例えば、寝屋川や堺に住む人が、わざわざ

千里山に引越すことは稀。むしろ色々の地方から大阪で就職を見付けたか、転勤で大阪に移って来られた方が千里山を選んだ。

*金持ちは寧ろ芦屋、浜寺、宝塚を選び、金はないが将来を夢みる若手が、この千里山を選んだ。

*その結果、年齢、環境の似た人々が集まった。その結果、二世も当然、似た年齢・環境となる。

*千里山一世の環境とは、親から田地畑はもとより職業すら受け継げず、教育以外に頼るもののない立場。結果、自分の子、つまり千里山二世にも与える資産や家業はなく、授けるのは教育のみ。

*大正12年(1923年)9月1日 関東大震災が起きました。多くの被災者が誕生しましたが、この被災者が千里山に移り住んだとは思えません。むしろその後、本社を東京から大阪に移す会社が続出。そのことによって多くの社員が東京から大阪に転勤してきました。千里山は彼らに丁度いい住宅供給地でした。それこそ計画的に作られたモダンで美しい、当時としては近代的な街、しかも柵のない、自分に似た年齢、環境で育った人々が住む街。

③ 千里山二世が育った時代の特徴

千里山会を過去・現在支えるのは、昭和一桁生まれから29回生(昭和20年生まれ 同33年千二小卒)までです。ここで述べる『時代』とはまさにこの間、つまり昭和初期から同30年代初期を指します。

(注) 32回生(昭和23年生まれ 同36年千二小卒)及びその後の一部卒業生を除く

千里山会を創った一世が第一子層であれば、27、29回生は末子層です。現に昭和18年生まれである私の千二小仲間は、実に末っ子が多いのです。でありながら千二小の学級数は増え続けるのですから、新たな民族移動が千里山に発生したと言うことです。千里山の住人に変化が現れたということは、街自体が大きく変化したということです。

この現象は何も千里山だけではないのでしようが、昭和30年代前半までの千里山が非常に小さくまとまり、変化の少ない時代だっただけにその変化の大きさを感じます。

その代表が、千里山駅と千二小の間の当時住宅公団による一大公団アパート群だと思います。その他、

郊外学園周辺、その後の千里ニュータウンへと繋がる、一大開発です。こうなるとは、隣町の境はなく、まさにボーダレスの世界。一体感も薄れて行きます。この当りの千里山の姿・特徴を紹介したのが、大宅壮一の「新日本発見」シリーズ『千里山』です。

(注) 千里山会誌第2号に掲載 参照

私の独断による時代の線引きと、その特徴。

* 昭和一桁生まれの方が育った時代は、満州事変に始まり、太平洋戦争が終結するまでずっと日本が戦争していた時代です。当然、あらゆるモノが乏しく、食糧、衣類、娯楽面が際立っていたのではないかと思います。

でもこのことは悪い面ばかりではないと思います。道路を走る車と言え、牛が引く肥荷車、野菜や米、藁を積んだ荷車ぐらゐ。だから道路は子どもの遊び場で、ベッタ、ラムネ、宝踏み、スケ、探偵ごっこ、缶蹴り、一段、戦争ごっこ、なんでもOKでした。

おまけにたいがいの家は子どもが4〜5人。ど

この家もその子が遊びに参加しているから、鬼から逃げるのに他人の家の庭も無礼講です。また大勢で遊ぶので、お兄ちゃん、お姉ちゃんも小さい子を甘やかせ遊んでやらないと人数が足りません。親からも下の子の面倒を見るように言いつけられてもいたはず。

結果、少しぐらい年が離れても深い絆で結ばれていたと思います。柿崎さんが福山さんに千二小の同窓会 再開を命じられ、二つ返事で奔走されたのも、この幼い頃からの深い深い絆があればこそ と思います。

* 戦中(中国での戦争を含め)―戦後を通じ、あらゆるモノが不足し、ある意味**原始共産社会**の様相を呈していました。千里山の住民として例外ではなかったはず。しかしそこは知的集団、上手く互恵関係を築き、ギスギスすることなく、時代に応じた文化的生活を享受されていたのではないかと想像します。

* 戦後しばらくは、一部のお金持ちを除き多くの家庭には、いまだテレビと冷蔵庫のなかった時代です。しかも各家庭は食べ盛りの子どもが4〜

5人も。となると食材を求めて毎日、下の噴水から駅にかけての商店街に買い物に行くしかありません。当時の千里山商店街は、駅から噴水までの50mほどと、噴水を中心に東西100m足らずに点在するお店のみ。だから一品種（八百屋、肉屋、米屋、本屋、お風呂屋さん等）一店舗のみ。着物に割烹着のお母さんたちが、夕方一斉に先の商店街へ繰り出します。当然、お母さんたちはここで出くわし、あちらの角でも、こちらの空き地で、サロン花盛り。

* 今では同じマンションの同じフロアーに暮らす隣人すら、外で会えば気が付かないほど疎遠な世界。でも当時は、お金があっても物が無い時代。その意味で、千里山の住民がオール貧乏時代と言っているのではないだろうか。

突然、ご主人が友人を連れて帰れば、お隣にお酒を借りた世界。TVを早く買った家は、お相撲等、隣近所を招待し、見せてくれた時代です。

「貧しいことを恥と思わない時代、世界。それが千里山であり、千里山の人々だった」その想いが今日に続いている。と私は思います。

四、最後に

『最後に』の前に強調させていただきたいのが、千二小の諸先生方のこと。少なくとも我々の年代（戦後育ち）の場合、先生方のお歳は千里山会の年配会員と変らないと思います。千二小卒業の先生も少ないかも知れません。

若い親に若い先生。更に物はなくとも夢が、戦後の青い山脈の明るい未来が拓がっていたように思います。

この諸先生方の情熱が今の千里山会の存在に大きく寄与したのでは。と思います。

物事は全て、いいがイイになるとは限らず、悪いがワルイになるとは限りません。『人間万事塞翁が馬』と言われる由縁です。

戦中・戦後の物不足が千里山人の結束を強くしたとしたら、昭和30年頃から始まった千里山周辺の再開発は、千里山の新たな時代の誕生であり、小学校が2分されるほど人口が増え、その分、絆、結束といった感情は希釈されていきました。

余談

『千里山はタラになり得るか？』

風と共に去りぬの最後で、何もかも失くしたスカーレットは『そうだ！私にはタラがある！』と叫び、立ち上がります。

千里山会の皆さんはどうでしょう。失意に陥った時、『私には千里山がある！』と叫べるでしょうか？

私の想像では、スカーレットは結局、タラへは帰らなかった。なぜならば、タラでは材木商を続けられないから。彼女が本当に求めていたものは、豊かで楽しかったタラでの想い出のみであって、タラそのものではない。と勝手に思います。

我々にとつての千里山も同じ。今となつては頭の中だけの世界。千里山そのものではない。

『素晴らしい世界であった』ことは真実だと思えますがその意味でこれからも、ずっと、ずっと思い出としてのみ・・・生き続けるのでしょうか？

否、私が対象としている頃を『よし』としている訳ではありません。ただ、毎年の会誌に載る「総会出席名簿」をご覧下さい。出席者の年代差は一部の例外を除き、30年です。ワン・ゼネレーション。時代、街、住民も変わりました。諸々の面で違いがあつて当然です。否、千里山会の総会に必ず出席されているお仲間の中にも、個人差とは別に、当然、この30年の年齢差に基く千里山会への温度差はあります。

歳が下がるにつれ、千里山会より、学年会をの想いを抱く人が増えます。その分、千里山会も後何年続くか解りません。

昭和一桁 頑張つて！ 人生、百年時代！

千里山会の浮沈は、昭和一桁生まれ+αの手に。さすれば戦中、戦後生まれも付いていきます。

継続は力なり！ 力は継続なり？